

わが国の医学部・医科大学はすべて図書館を持っている。また近年博物館ブームといわれるほど各地に各種の博物館ができている。しかしこれらの中で医史料の蒐集と保存に前向きな姿勢を示すところは少ない。医学部・医科大学の場合にはわが国に正規の医史学教室がほとんど設けられていないことにも一因があるであろう。

一方、京都の小石家（小石秀夫当主）のごとく、何代にもわたる貴重な自家の伝来史料を整然と管理されているところもあり、またやはり京都の和田医史料館（和田和代史当主）のように文字どおり一代で、それも短期間に他に比類をみないほどの史料を集取されるかたもある。

当然のことながら貴重・一品ものの史料は容易に市場にでないしでも高価で我々には手が出ない。積極的に海外に医史料・医書を求めて出かけていく人もある。国内での医史料・医書の価格は他の分野のそれに比して高目に設定されているように思えるのは、この方面の購買力が旺盛であり、関心の高いことを示している。たまに比較的低額に設定された史料が出たときはたちまち競争者があらわれて

自分の手許に落ち着くことは少ない。

個人蒐集の場合は資金のあること、整理能力、保存スペース、そしてそれを如何に活用するかということが問題になる。

三木栄先生は臨床医として朝鮮に赴任されていたとき、あまり注目されていなかった朝鮮医書を系統的に精力的に購入され、これらをもとに『朝鮮医書誌』などの世界的業績をのこされた。先生は関係書を執筆後、朝鮮医書を一括、杏雨書屋（大阪市）に入れられ、他の書は周辺の人に配布され、残ったものは古書店に売却し、それを資金にしてつぎの書の執筆・出版にあたられた。先生がこまめに書き入れされていた本は『三木先生手沢本』として特別の価格が付けられた。

小生ごとき資金・スペース・整理能力いずれもゼロに近いものは蒐集・保存は最初から諦めて、図書館・博物館などを利用していただくことになるのだが、しがたい開業医の身、平日はほとんど動きがとれず、国会図書館などは何十年も訪れる機会がない。ありがたいのは一部であるが『古医書目録』の出されていることであり、中には希望部をコピーして届けて下さるところもある。最近も内藤記念くすり博物館所蔵の図書でこの恩恵を受けた。国内の医

学部図書館で古医書・雑誌が充実し管理も行き届いているところの一として金沢大学医学部があげられる。ここには学外顧問ともいうべき寺畑喜朔先生が関与しておられ、個人的依頼にも迅速、丁寧に応じて下さり、小生はその恩恵に浴している。ただこれはいわば特別のケースであつて、いつまでもそれに甘んじているわけにもいかず、将来的にはやはり組織として、マニュアルによって動く態勢になることが望ましいであろう。

出身大学の学長をつとめられたこともある一医史学者が亡くなられ、遺族は出身大学に全蔵書の母学寄贈を申し出られたが、大学側は困惑の姿勢を示したと聞いた。大学側としては自分の欲しいもののみをつまみ食いできるのであれば鬼に角ということであろうが、これも難しい問題である。実際、他の大学図書館でも〇〇名誉教授寄贈とされたダンボールがほこりをかぶつて山積みされているのを見たことがある。

個人がそれなりのポリシーを持つて蒐集した医史料のコレクションが、その死亡とともに古書店に売り払われたり、ひどいときは廃棄されたりすることは惜しまれる。専門家や古書店などの第三者機関によつて、古書店の買入れ価格よりやや低目の価格査定をした上、コレクションを一括し

て、適当な機関などに購入していただければ、遺族にもそれなりの収入が入つて喜ばれると思う。これは当人の希望により生前にそれが行われても良いだろう。むろん価格査定をしてくれた人には、応分の報酬を払う。しかしあくまで商売ぬきのボランティア性格の強いものだけに査定者を得ることが困難かもしれない。

今は不景気であり、とくに国公立機関は不定額のワクを予算にとつておくことは難しいと聞く。しかし一点、何億円もの絵画などを気軽に購入したりもする。要はその意気と努力であろう。

「日本における医史料の蒐集と保存」の現状は寒心に堪えないともいえるが、上記したように、アクティブな動きを示す個人・組織も少ないながら存在し、幾多の天災や戦災を受けたわが国がなお世界的にも恥ずかしくない医史料を保存・活用していることは驚異であり、悲観するにはあたらないと思う。希望を持ちたい。

23

長 与 健 夫

江戸中期『解体新書』の発刊以前に既に当時の欧州の医